

ア一面白く
ない

各所に篝火を焚き、座敷に飛込む數多の小蟲を焼殺す爲であつたのである、得庵は夫れと見るなり、忽ち顔色を變じ、ア一面白くないと手に在る碁石を春敵に叩き付け、乃公は歸ると起上つた、春敵は事の意外に驚き、得庵を引留めて、又貴様の例の疝癩かと云ふと、得庵は益々怒つて、これで疝癩を起さない様な奴なら阿呆だ、譯が聞きたくば聞かせてやらうか、一體貴公と乃公とが一夕の娛樂の爲に、篝火を焚て無量無數の蟲まで焼殺すとは何事だ、又下僕等も就眠さすべき時間なるに、皆起きて働いて居る様子だが、是れ程の無慈悲残忍はあるまい、位人臣を極めたら、少しは注意しろ、と、捨臺詞を残して去つたと云ふ、得庵廿年の修禪は此一齣に於て見られる。

得庵廿年の
修禪

豊太閤の活作畧

前項の話から不圖思ひ出したが、太閤が一匹夫より身を起して天下を取つたの

一佳話

を見て、多くの人は公の智謀で取つたやうに思ふ人もあるが、必ずしも然うでない太閤が天下を取るには實に人の知らない苦勞があつた、茲に一佳話あり、或時太閤が部下の諸將を集めて、饗宴を催すと稱し、茶の湯の會を催した、其時諸將の中に一人習癖として、何時も水漬を垂らす大將があつて此水漬先生も自分に此惡癖あることを知り、他の大將方もそれを知つてゐるから、常に双方から同席することを嫌つてゐたのである、が併し太閤の御意とあるからには仕方がない、招かれて茶の間へ這入ると、諸將はズラリと居並び、太閤は御手前で茶をたて、居られる、處が其日の作法に限りて、濃茶と云ふ、一口宛飲み廻はしの式であつたから、悪い首尾は益々悪い、水漬先生の上席の者は何の苦痛もないが、その次席の者こそ、いゝ迷惑だ、順が廻つて来て、水漬先生恭しく一口飲み、威儀正しく次席に譲らんとした途端、例の水漬はツルリと茶碗に落ちた、サア大變、水漬先生は大に赤面し、次席の者はマゴ〜して居ると、それと見て取つた太閤は、

豊太閤の活作畧

當意即妙

間髪を容れず、「一寸待たれ、塵が這入つて居る」と云ひつゝその茶碗を引つたり、グツと自分に飲み干して、更に茶碗を洗つて新鮮なる茶をたて、又次席より廻はしたと云ふ話がある、此當意即妙の一作略に依りて、水漬先生は幸に恥を匿くされ、次席の者は水漬の茶を飲まずに済んだ、太閤が群雄を操縦する遣方は概ね此類であつた、故に太閤の爲ならば、一番馬前に於て討死せよと云ふ部下も出来たのである、太閤が水漬の茶を湯こぼしに溢ぼさずして、グツと一氣に飲み干した處に、千金の値打がある。

白い紙を黒くするのだ

無功德

山岡鐵舟居士が、毎日課業として經文を寫して居る所へ、或る人が来て貴下は何を爲さる、居士曰く何にもしない、或人曰く、何か功德になりますか、居士曰く無論無功德である、或人曰くそれなれば何を爲さる積りだ、居士曰く白い紙を黒くして居るのだと、人間も白い紙が黒くされるやうになれば、修行も餘程出来て居るが、さて此白い紙が存外黒くされぬから困まる。

乞食何人ぞ我れ何人ぞ

乞食何人ぞ

獨園禪師の居士に井上と云ふ人があつた、此人が云ふのに舜何人ぞ我れ何人ぞと云ふのみではまだ手の届かぬ所がある、乞食何人ぞ非人何人ぞ、下女何人ぞ小僧何人ぞと、上下を打して一團と爲し、反省しなければなるまい、初雪やあれも人の子樽ひろひではないかと云つたとやら。
儒教に「神を祀る、神在ますが如し」とあるのを、或宗匠が之れを批評して、儒教はまだ手ぬるい、「神を祀る、神在ます」でなければならぬと、言はれたことを記憶して居るが、先きの話と好一對の佳話ではないか。

神在ます

乞食何人ぞ我れ何人ぞ

糞もふけば金の采配も握る

伊達正宗が仙臺通錢を鑄造した時、奥羽諸藩の老臣が仙臺に會同した、其時正宗から其錢を披露すると、各老臣は皆手に取つて見たのに、獨り上杉藩の老臣直江山城守兼續のみが、扇子を披いて正宗の前に差出し、此上に載せて下さいと云ふ態度を示した、すると正宗は早合點して、直江は三十萬石取るも上杉の臣下である、乃公は奥羽二國の大主である、乃公の手より直接に請取るは失禮であるから、殊更に扇子を出した事と推量して、「御遠慮には及ばぬ、直に御手で請取りなされ」と云ふと、直江は形を正し色を改め、「拙者の手は采配を握て千軍萬馬を指揮する手で御座る」と答へた、正宗隙さず、「左様で御座るか拙者の手は糞もふけば金の采配も握る」と云つたので、流石の直江も一本參つたと云ふことだ、兎角世間には金の采配ばかり握りたがる手が多いから厄介だ。

拙者の手

畢丸は男子の徽章なり

伊達正宗が十二三歳の時、戰爭に大敗して、片倉小十郎と匍匐して芋畑へ逃げた、其途中片倉の思ふには、此幼弱の主君を輔佐しても、膽力がなければ、何の所詮もない、然る時は正宗を廢してなりとも、伊達家を興隆せねばならぬ、今は幸ひ其試験を爲すに好都合なりとし匍匐しながら後ろより正宗の股間に手を入れた、然るに正宗の畢丸はヌルリと伸び下つて居たので、片倉は大に悦び、是れでこそ奥羽二州に天晴れ雄視する器局であると信じ、輔翼の大忠を盡したと云ふ話がある、若し此時に正宗の畢丸が縮み上つてゐたならば、片倉はどんな考を出したか、慥に正宗の身に取つて一大不利であつたに相違ない、が幸にヌルリと伸び下つて居たので、自身の迫害を免かれたばかりか、片倉までが伊達家無二の忠臣に成つたとは、宇宙の大靈即ち那一物が、是の如く幾微の間にも躍動して居る證據では

片倉小十郎

宇宙の大靈

畢丸は男子の徽章なり

ないか、宇宙萬有の活躍は即ち其神縮消長である、翠丸も萬有の一であるから
は伸びもすれば縮みもする、正宗は大敗北の時にヌルリと垂れ下つて居る翠丸を
持つて居たればこそ、他日雲蒸龍變東北の覇權を握つたのだが、若し志を遂げ功
を成した時にのみ、ヌルリと垂れ下る翠丸を持って居たならば、片倉は歎息流涕した
であらう、然るに世間の多くの翠丸は、逆境には縮んで逆に制せられ、順境には
伸びて順に制せられる、如此き翠丸は男子の徽章としての價値はない。

順逆

無相大師

京都妙心寺の開山無相大師は、一生涯頭壁立萬仞、嘗て人の爲に温顔を借さざ
る底の大宗匠であつて、極めて惡辣峻峭の禪を擧揚した人であるが、或る日の
こと、一僧あり、江州飯高山の寂室和尚の會裡より來て參問を求め入室した、大
師問うて曰く「飯高山の寂室和尚は、常に坐禪を爲さると聞き及ぶ、果して然る

形ちの坐禪

歟」僧曰く「仰せの通り毎日坐禪をなし、學者にも坐禪を勧誘して居られます」
大師曰く、「試に飯高山の坐禪を仕て見よ」と、すると其僧は直ちに起つて面壁趺坐
した之を見て、大師は「這の偽坊主！」と呵咄して遂に三十棒を興へて放逐して仕
舞はれた。是れは何ういふ消息を漏らしたものであらう、此時に彼の僧が大師の面
前で素裸になり、越禪一つで、すて、こでも踊つて見せたなら、嘸かし大師の御
氣に入つたであらうが、惜い哉、彼の僧は形ちの坐禪に囚はれた。

利休の死人坐禪

又茲にこれに類した話がある、千ノ利休は大徳寺の廣月和尚に參禪し茶禪一味
の蘊奥を極めた人で、太閤も頻りに利休を敬愛し、利休は豪い／＼と云つて居た
が、併し太閤の眼から見ると、何うしても廣月よりは利休の方が數段上手に見え
て叶はぬ、然るにその利休が廣月を師として居るから、太閤は益々不審に感じ、

廣月と利休

利休の死人坐禪

一聲爆然

二者熟れが偉人である歟、兎に角兩者の力量を試すが何よりの妙策と、或る日の事、廣月と利休とが茶室に入つて相對坐し、悠悠茶を點じて居るその不用意の處へ、思ひ掛けなくも、一聲爆然、巨大なる空砲を打ち込んだのである、すると師の廣月は吃驚仰天轉ろげるが如く室外に飛び出し一方利休は從容として一絲亂れず、彼の「寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦しきもなし」と云つた調子で悠揚と茶をたてゝゐたものであるから、太閤は、乃公の觀察果して當れりとなして、他日利休に向ひ、「尊公は廣月を師とし仰げるか、和尚はそんなに豪い人か！」と云つて問ふと、利休は「師の事は吾等凡人の能く窺知する限りではありませぬ」と答え、尙ほ益々尊信の躰が見える、仍て太閤は再び不審に思ひ、今度は廣月に向つて「過ぐる日余が兩人の力量を試す爲、空砲を打ち込んだ處、貴僧は遁げ出し、利休は泰然自若として居たが、一体あの時貴僧の心持ちは如何であつた歟」と云つて、暗に探りの手を入れると、此時廣月和尚の答話が面白い、「利休と

生々活々の

大師當時の
妙心寺

云ふ男は鈍漢である、空砲を打ち込まれたか、實彈を打たれたか、それすら分らずに茶をたてゝ居るやうでは眞逆の時にどれ程の働きが出来よう、利休の禪は死人禪だ、俺は直ぐ様空砲と見て取つて、硝煙の臭きに堪へなかつたから飛び出したのである」と、これを或る人が批評して廣月和尚がその空砲たることを直ちに知り得たか否かは暫く別問題として、兎に角太閤の問ひに對して和尚の機輪の轉ずる處(氣轉の利く處)が豪いと云はれたが、余も頗る同感である、生々活々の禪はコレでなくてはならぬ。

雨漏りに箆籬

又無相大師に就て一つの面白い話がある、大師御住山當時の妙心寺は現今の如うな宏壯な伽藍ではなくて、見るからに見窄ぼらしい一小破庵であつた、或る年の夏に一日驟雨沛然として降り來り、屋漏の甚しき恰も瀧の如くであつたので、

雨漏りに箆籬

悟道の妙味

大師は侍者を呼んで、「誰か水受けを持って来い」と仰せられると、一人の小僧が籠桶を持って往つた、すると大師は「この頼預！」と云つて非常に呵責された、で又一人の小僧が急に箆籬を持って往くと、大師は莞爾として「出来した〜」と云つて大に嘆賞せられたと云ふ話が傳はつてゐる、雨漏りに桶を持って来た小僧が叱かれて、箆籬を持って来た者が賞められたとは、一體如何いふ譯であらうか、爰に不可言的悟道の妙味がある、箆籬の爲に妙心寺の雨漏りは未來永劫に止まつて仕舞うた。

雲居の機智

帆掛け船

三代將軍家光の時代に、東京品川の東海寺に二人の雛僧が居た、或時將軍東海寺にお成りになり、何かの機みに二人の雛僧に向ひ、唐突に海上を指し、「あの帆掛け船を急に止めて見よ」と云はれると、一人の雛僧は急に起つて前の障子をビ

兩眼を閉じた小僧

シヤリと閉ぢ、他の一人の小僧は承知しましたとて、その儘兩眼を閉ぢた、家光兩人の機智を愛し、就中兩眼を閉ぢた小僧を厚く賞せられたと云ふことである此兩眼を閉ぢた雛僧こそ後年松島瑞岩寺の中興となり、伊達侯の歸依を受けられた雲居禪師其人である。

盤珪禪師賊僧を憫む

賊僧

播州網干龍門寺の盤珪禪師は曾て大石良雄が參禪入室し、又櫻町天皇よりは大法正眼國師の國師號まで宣下された程の碩徳であるが、此の盤珪禪師が曾て龍門寺に於て、大勢の雲水の世話をして居られた時、衆中一人の賊僧があつて、彼れは何を取られ、此れは何を盗まれたとて、日々紛失物の絶え間が無かつた、後ちに至りて、其賊僧は誰れであると云ふことも判明した處から、盗まれた雲水の誰れ彼れは最早容赦をせず、何んにもあれ、彼の賊僧を放逐せずんば已まぬの決

盤珪禪師賊僧を憫む

一人の雲水

心をもて、禪師の室に到り、何卒か彼の賊僧を放逐して下さいと逼る、禪師は毎時諾し々と答へ乍ら、ついぞ放逐する様子も見えない、乃で遂に勘忍袋を破裂させた一人の雲水は「どうしても、あの賊僧を放逐することが出来なければ私へお暇が頂戴したい」と出ると、禪師は一向平気で「左様か、然らばお前に暇を取らず」と云はれたものであるから、其の雲水は全く呆氣に取られ、自分が恚ういうて出たならば禪師は定めし彼の賊僧を放逐されるに相違ないと思つて訴へたのに、反對に自分の方へ暇が出るとは怪しからぬと云つてさなきだに不平満々たる件の雲水は「一體斯うした場合には、彼の悪む可き賊僧を放逐するのが至當であるに、然るにその事なきのみか、二十年間も老師の膝下に侍し、何に一つ失敗のなき私を放逐なさるのは、全體何ういふ譯であります」と云つて、胸中の鬱憤を漏らすと、禪師の曰く、「まあ能く考へて見よ、お前は廿年も衲に就て修行した者で、今衲の膝下を離れても充分立派に世間の通れる身分ぢや、が彼の賊僧は

禪師の赤誠

今衲の處に居るからこそ、無疵の人間で居られるが、放逐したならば、はや其日から社會の罪人となる、罪人とするは易く無疵で置くは難し、是れ衲の容易に放逐せざる所以である」と、此の難有き御垂誠を聞いた雲水は禪師の赤誠に感じて鬮然語る處あり、更に此事を耳にした賊僧は一層改悟して、爾後決して盜心を起さなかつたとある、人を化する蓋し此類であらねばならぬ。

西郷南洲の禪機

西郷南洲が國事奔走の際、一夕京都の某酒樓に上つて二三の同士と痛飲した時座に一美人あつて盃盤の間を周旋してゐたが、酒三行正に酣なる頃、件の美人は西郷に向ひ「西郷さんお土産を……」と云つた、乃で西郷は隙さず眞赤な火鉢の炭火を一つ挟んで、「では之れを……」と突き出すと、美人は「難有う」と云つて兩手に受けたまではよかつたが、あつたら兩手に火傷をしたから、何とかして此

西郷南洲の禪機

あゝ有難う
の報復をと思ふが、更に名案がない、寧ろのこと、今度は美人の方から又炭火をはさんで西郷に、「さあ御返禮を……」と差出すと、西郷は周章てるかと思ひの外、頗る落付き拂つて、「あゝ有難う……」と云ひつゝ、貰一服を吸ひ付けた、「イエ貰の火ではありませぬ、あなたに御進上するのです」「ウン進上物か、では紙に包んで水引を掛けて来い」と酬はれて、美人は口あんぐり、返す言葉もなかつたとある、

仙崖和尚の奇行

大垣藩の政治

博多聖福寺の仙崖和尚(天保八年示寂)は、今一休とでも云ふ可き奇僧で、奇行の数々はどれも此も面白い事ばかりで、既に前にも和尚の事は書いて置いたが、尚ほ茲にその狂歌を紹介して見る、和尚は美濃大垣の人で、若き時一時大垣在の某寺に居られた、恰もその當時大垣藩の政治が非常に紊亂して、幾度役人を更迭

しても、更に治まらないのみか、却て益々紊れゆく有様なので、仙崖和尚は得意の狂歌を讀んで、暗に之を諷示された。

よからうと思ふ家老が悪からう

元の家老がやはりよからう

處が此狂歌が遂に家老の耳に這入ると、家老は大に怒つて和尚を國外放逐とした、其時又和尚は

傘をひろげて見れば天が下

たとへふるとも衰(美濃)は頼まじ

の一首を残して、飄然何處ともなく去られた。

其後和尚は博多の聖福寺に住し、和尚は此寺に隱遁して書畫の揮毫を避ける積りであつたのが、却て益々依頼する人が多い處から、惡戯れて又左の狂歌を讀まれた、

仙崖和尚の奇行

國外放逐

うらめしや我が隠れ家は雪隠か

来る人毎に紙おいてゆく

米香煎か麥香煎か

鳥尾得菴(小彌太)は山岡鐵舟と親交あり、一日鐵舟との話次、得菴大に教界の腐敗を慨して、現代の僧侶は役に立たぬ、穀潰した、國賊だと言つて惡罵熱嘲を逞うした時、鐵舟は「君のやうに然う十把一束に云ひ玉ふな、一度自分が引合せる坊主に會つて見よ」と云つて、種々に懲慙したが、得菴容易に聴き入れない然るに鐵舟は強ひて得菴を鎌倉に同伴し、洪川和尚に會はせると、元來坊主を視ること土塊の如きであつた得菴は洪川和尚の前に進み出で、挨拶も碌々にせず、久しく洪川(香煎)と聞く、麥香煎が米香煎か?

洪川和尚

と、何んでも此の一言下で洪川和尚をやつ付ける積りで、此の一間を發すると、和

禪門の活作畧

尚はツカ〜と二二歩進んで得菴の前に突ツ立ち、得菴の横面をウンと毆つておいて、「どちらか喰つて見よ」と云はれたには、流石の得菴もギャフンとまゐつた、が得菴も然る者は是に於て大に悟る處あり、遂に之れが居士入禪の動機と成つて、横面一つが他日大きな鯨を得る因縁と成つたとは、禪門の活作畧、實に痛快事ではない歟。

以身說法

越中國泰寺の現管長龍水和尚が美濃伊深の正眼僧堂で修行して居られた時代或る年の春、恰度僧堂の制間に、一人の同行と尾張の繼鹿の觀音へ往つて山の半腹にある觀音の籠り堂に入つて、一週間の斷食接心をせられたことがある、處が恰もその三日目の夜半に籠り堂の兩戸を頻りに叩いて若しくと呼ぶ者があるから、二人の雲水は此の夜中殊に山間の此の籠り堂に来る者は、テツキリ盗人なら

斷食接心

以身說法

立石の番頭

んと推量して、初めの内は、二人共黙々として答へずにゐたが、「もし御出家様、夜中に甚だ濟みませんが、何卒かお開けを願ひます」と云ふから、不審に思つて遂に雨戸を開けると、一人の若者が恐る／＼出て、偕て何を言ふかと思ふと、「私は犬山町の立石と申すもの、番頭であります、本日店の若主人が藝舞子連れ、此山へ花見に参られると、あなた方二人が、此籠り堂に顔青ざめて何か仔細ありげに坐つて居られたものですから、主人は不思議に思ひ、本坊に往つてあの坊様は何ういふ人であると云つて訊ねますと、あれは伊深の僧堂の雲水で一週間の斷食接心を仕て居るのでありますと聞いて、若主人はほと／＼感心し、嗚呼今の世にもあゝして修行する人があるか、自分は親の財産で放蕩の有る丈けを盡し而已ならず、三度の食事にさへ、小言の八百を並べてゐるに、二人の坊さんは見れば齡も若い、然るに食ふものをも食はずに修行して居られるか、嗚呼自分は何とした淺間しいものであらうと、不圖自分の脚下へ氣が附いたものですから、今

五目飯

夕も家に歸つて、兩親に今までの不孝を詫び、今後は真正直に成つて働くから、何卒かあの坊さんに何か御馳走をして上げて下さいと逼まり、兩親も大に喜んで早速拵へて持つて來たのが、是れであります、嗚お腹が減つたであります、召し上つて下さい」と云ひつゝ、一個の風呂敷包みを差出した、見れば五目飯の御馳走である、二人の雲水は一旦願心を立て、一週間は斷じて何物をも食はぬと契つたけれども、謂れを聞けば難有き五目飯！折角の好意を無にするのもと云つてその晩は不意の御馳走に有り付き、翌日から改めて又更に一週間の斷食接心を續けられた、而してその若主人と云ふは本年既に六十何歳で現今でも尙ほ犬山町に立派に商賣をして居る、立石氏は此の籠り堂の雲水の感化は、生涯私の念頭を離れぬと云つて居られるさうである。

柳生但馬入禪の動機

極意に流派
なし

心法

柳生但馬守が江戸に道場を開いて大勢の門下を指南してゐた時或時一人の僧が竹刀の音を聞いて柳生の道場に來り、漸くその試合を見てゐたが、將に歸らんとした時、「柳生はモー少し竹刀が使へるかと思つたら、存外である」と云ひつゝ去つたので、之れを聞いた柳生は大に怒り、早速その僧を呼び止めて「貴僧は予の道場を嘲笑されるが、一體貴僧は何流か？」と問ふと、僧曰く「極意に流派は御座らぬ」柳生は益々怒り、「然らば予と一勝負せよ」と云つて、道場に引入れた、僧は閉口して逃げ出すかと思ひの外、悠揚として諾し、道場の中央に突ツ立て、扇子を竹刀の代りに持ち、「サア打て」と身構へた、柳生は「此の青坊主！ 何程の事かあらむ」と、竹刀をおつ執つて一撃の下見事粉砕せんとしたが、何ぞ圖らむ僧の全身は一本の扇子に隠れて寸分の隙きもない、流石の柳生も大に驚いて、「貴僧の劍法は予の到底及ぶ處に非ず」と忽ち降參して慎んで教を請ふと、僧曰く「御身は劍法を知ると雖も未だ心法を知らず」と云つて、其心要を説き聞かせた、する

澤庵和尚

と柳生は益々感服し、遂にこれより修禪の志を起したとある、此僧は誰であらう、澤庵和尚であつた。

澤庵和尚の劍法

老鼠

劍道の極意に就て茲に又斯ういふ面白い話がある、或る劍客の家に一匹の老鼠が居つた、此老鼠は到底普通の猫では容易に捕り得ぬと云ふ程、却々の強者であつたのであるが、家の悪戯を行つた處から、その劍客は是が非でも此老鼠を退治せようと思ひ、或る時選りに選つた、一匹の屈強なる猫を携へ歸つて件の鼠を捕らせようとすると、初めの内は猫と鼠と互ひに睨み合つてゐたが、間もなく鼠の方より猫に飛び掛つて、猫は顔一面を掻き撈しられ散々の目に遭はされた、乃でこれではならじと、再び新銳の猫を選んで兩者相向はしむると今度は双方共に睨み合ひをしたばかりで、結局は第二の猫もその鼠を捕ることが出来なかつたのであ

澤庵和尚の劍法

る、次に三たび第三の猫を以て當らしむると、その猫は鼠を見ると、造作もなく飛びついて一噛みに噛み殺して仕舞つた、處が話變つて主人の劍客が夜半靜かに眠りに就てゐると、何處ともなく物音がするので、怪しからんと耳を聳つれば、意外々々、次ぎの間に於て大勢の猫が集會を開き、今日退治した鼠に就て、頻りと評定を行つてゐる、これは面白いと愈々耳を澄まして聞いて居ると他の一匹の猫が第一の猫に向つて曰く「今日貴公はあの鼠に散々の目に遇はされたが、一體貴公は、如何いふ用心をして向つたのだ？」第一の猫の曰く「自分はあの鼠は非常に強いといふことを聞いてゐたから、如何に強くとも、自分等には鼠を捕る天與の爪があるから、此の爪でふ技術を以て向つたならば、老鼠恐る可きに非ずと覺悟して向つた處、遂ひ反對に失敗を取つたのだ」と答ふ、で又第二の猫に向つて「貴様は何故あの鼠を捕り得なかつたか」と問ふと、その猫曰く「凡そ敵と戦ふには氣合に若くものはない、故に自分は氣合に限ると一圖に思つて向つた處、

技術

氣合

俺れは猫だ

南柯一場の夢

遂に氣合負けをして仕舞つた」と云ふ、これを聞いた他の幾十匹の猫は第三の猫に激賞の辭を浴せ掛け、貴公は豪い、貴公は豪い、誰れは技術を以て向ひ、彼れは氣合を以て向つたに、それすら失敗を招いた、然るに貴公は造作もなく一噛に噛殺して仕舞つたのは、如何にも豪い、一體貴公には、あゝいふ強い鼠を捕るに何かの秘術がある歟、あらば教へて呉れよ」と逼まるのに對して、第三の猫の曰く「イヤ秘術も何にもない、俺れは猫だから鼠を捕るのだが、皆の者能く聞け、君等は自分を大層賞めて呉れたが、まだ自分より一層豪い猫がある、その猫は生れて以來、未だ一匹の鼠を捕つたことのない猫であるが、併しその猫の居る八丁四面の場所には、實に鼠の影だにゐない、此猫には自分も到底及ばない、ソレ皆の者能く聞け劍道の極意此處にあるぞ」と云つて、滔々氣焰を吐いたかと思つたら、何ぞ知らん是れ南柯一場の夢であつたと云ふ話である、之れが即ち澤庵和尚が柳生に授けた劍道の極意であつて、此虎の巻は今現に山岡家(鐵舟)に傳つて居

澤庵和尚の劍法

ると云ふことである、所謂大策は無策、大術は無術であるから、劍道であれ、世法であれ、凡そ極意は此處に到らねば徹底したものは云へまい、堯舜の無爲にして天下を治めたと云ふのも即ち此理に外ならぬ。

一休艸賊を度す

一休和尚が或る年旅行中に追剝に遭はれた、四五人の艸賊がバラ／＼と來つて一休和尚を取り圍み、彼等の例として草鞋錢を呉れよと強請ると、恬淡無欲の一休和尚は早速承諾して、懷中より財布を取り出し「サアこれで好いか」と言つて渡された、が尚ほ飽くことを知らぬ賊等は此上まだ一休和尚の衣帶を剝がんとするから一休和尚又早速承諾で「諾し／＼」と云ひつゝ素裸になり、その將に去らんとする時、

前きの世に借りたを返すか今貸すか

何れ一度は報い來るべし

の一首を詠んで越禪一つで飛び出されると、如何な事賊共も感心して、遂に一休和尚に懺悔して爾後眞人間に成つたと云ふことである、人を濟度するにも色々の仕方がある、此話を嚮に予が掲載しておいた雲居、空也の話と併せ考ふる時は、茲に無量の妙趣を感じる。

禪學は瓢箪のやうぢや

建仁寺黙雷老師曰く、禪學は恰度瓢箪の中へ這入るやうなものだ、最初は口が小さいので却々這入り難い、漸つと這入ると、少し天地が廣うなつた心地がする中程で又狭くなる、其狭い程の一關を透過すると、今度は初めて兩岸の桃花を觀賞しつゝ輕舟峽を出で、大湖に漕ぎ出づと云ふ趣きがあるのぢや、が併し又何時までも瓢箪の風景を樂んで居ても尻が腐るから、スグ又その瓢箪をも打ち碎か

禪學は瓢箪のやうぢや

ねばならぬと、面白い譬諭である。

白隠和尚の事ども

大燈録を讀む

白隠和尚は元來肯かぬ氣の性質で、機鋒又た峻峭、隨分鼻息の荒らかつた和尚である、會下の老兄や、居士の某々等が、「大燈録は實に難有い語録であるから、何卒か一度御覽に相成り、又吾等にも提唱をして戴き度い」と頻りに頼むと雖も和尚は、大明以來彫刻の諸録を見るに、一紙も亦取るべきなし、縦ひ國師に分外の事あるも豈に齒牙を鼓して評唱するに足らんや」と云つて、殆んど眼中三世の諸佛なしと云ふ見幕であつた、處が或時和尚が某家の招聘に應じて肩輿を命じて數里の途を往かれる際、會下の一人が、「若し和尚の披見さるゝともあらば」とて窃にその一帙を把りて輿中に投じ以て和尚消閑の具に供すれども、和尚顧みず、

眼中三世の諸佛なし

槐安國語

往くこと二里餘にして輿丁とある一茶亭に休み、和尚も亦少しく寂寞を感せしを以て、不圖棚上の一帙を把りて、之れを披見せしに、何ぞ圖らむ、平素莽々齒々底の閑文字として見識つてゐた大燈録は、實に毒焰膽を照らし、怒氣骨に徹する大文字であつたので、一讀三嘆、手を拍つて大笑し「我れ馬齒從心に近うして此録有るを知らず、拜披何んぞ晩きや」と、且つ悔い且つ悦び、それより一々國師(大燈)の語句に參じて、遂に下語を附して一書を著作された、これぞ有名なる槐安國語であつて、白隠の名は是れより大に天下に鳴り響いた。

ウンよしく

白隠和尚が大勢の雲水を世話して盛んに禪風を舉揚して居られた、即ち和尚の全盛時代に、駿州原宿の松蔭寺の門前に和尚の信者があつた、その家に一人の娘があり、此娘村の若者と懇懃を通じて孕み女と成るや、兩親はそれと感附いて、誰れの子ぢや言つて見よと逼まるが、娘は恥しくて云へない、兎角する中玉のや

白隠和尚の事ども

ウソ諾し

道の大悪僧

うな男の兒を分娩したから、父親は大に怒り、サア誰れの子ぢや白状せよ、白状せば好し、左なくば親子諸共打殺して了ふと云ふ、ドエライ見暮に、娘も大に困じ果て、窮餘の策として、何を匿くさう、此の兒は白隠様の兒であると云ひ切つた、蓋し白隠和尚は自分の父親が日頃尊信してゐる善知識である、で白隠様とさへ云へば、ヨモヤ父親は怒るまいと思つて告げたのが、却て父の怒りを買ひ、斯くと聞いた父親は烈火の如く怒り、白隠和尚は私が日頃歸依してゐる和尚であるその者が家の娘に疵を附けるとは怪しからぬ、汝！ 這の大悪僧、思ひ知れ、…と、腹立ちの餘り、その赤ん坊を白隠和尚の處へ連れて行き、和尚に向つて曰く「坊主！ 能く聞け、是れはお前の子ださうな、汝より出づるものは汝に返すのだ」と、あられもなき悪口雑言を吐き散らし、剩さへその赤ん坊を和尚に抛げ附けて歸つたと云ふ始末、其時和尚曰く、ウソ諾し〜と。

斯くて赤ん坊を受取つた和尚は、其後彼處で一ト乳、此處で二タ乳と云ふ工合

兩親は吃驚仰天

に貰ひ乳をして養育して居られると、娘なる産みの母親は見るに見兼ねて、罪もない白隠様に此苦勞をさせるとは、何うした業報であらう、嗚呼悪かつた、濟まなかつたと、矢も楯も堪まらぬ思ひをなし、遂に實を告げて、斯く〜の次第と一伍一什を物語ると、兩親は吃驚仰天「それなればナゼに早く打明けなんだ、エエ忌ま〜しい」と、地團太踏んでも後の後悔先きに立たず、何には兎もあれ、早く貰ひ受けて來るが宜い」と、嚮に抛げ附けて歸つた父親は、今度は合掌三拜、七重の膝を八重に折つて詫び入り、「何卒かその子供が頂戴したい」と云ふ、此時も白隠和尚は多くを語らず、ウソ諾し〜と云つて渡されたと云ふことである、抛げ附けた時もウソよし〜、受取りに來た時もウソよし〜、此のウソよし〜の一語を味はねば白隠和尚の眞骨頂は讀まれぬ。

白隠が通る

白隠和尚の自坊松蔭寺は、興津清見寺の末寺で、末寺の住職が興で本寺の門前

白隠和尚の事ども

を通行する時は、門前丈け必ず下輿する掟であつたにも拘はらず、和尚は何時も乗打ちされるから、當時清見寺の住職は大に怒り、或日のこと、和尚が通行すると聞き、直ちに門前に走り出で、「松蔭寺は乗打ち無用」と怒號一喝した、すると和尚は輿中より大聲あげて「松蔭寺は通らぬ、白隠が通る」と言つて、平氣で乗打されたと云ふ話がある、清見寺の住職は倒退三千であつた。

●●●
隻手の音

隻手音聲は白隠和尚自製の公案で、随分名高い公案である、和尚は此の隻手の聲を諸人に聞かして遣りたい、聞かせ度いの慈悲心より或は之を詩歌に詠じ、又は文章に綴り、若くは手紙に事寄せて種々と隻手音聲を勵めて居られるが、中にも一讀最も面白く最も有益なるは「御洒落御前物語」の一文である、而已ならず之を読む時は白隠の文藻をも窺ひ知り、又和尚が如何に下化衆生に熱心であつたかも、自ら知ることを得るから、爰にその全文を掲載して見る。

爰に播磨の灘屋の娘、年は十六おしやらく盛り、きりやう骨柄サテたぐひなき、唐で楊貴妃日本で小町、釋迦も達磨も手をうち逃る、去年の春より只うつと、色でやせるか辛苦があるか、かたり玉へと皆人間へば、辛苦なければ色でもやせぬ、わしは悟にうき身を棄つす、寝ても起きてもサテ歩むにも、どうぞと只一筋に、心かけたたりや途らち明いて、兎角皆さん異見ぢやないが、わしがいふ事能く聞かしやんせ、憐れなるかな世間の人の、くらす稼業をよく見れば、千とせ百とせいくべき様に、心うか／＼月日を送る、今に死ぬべき事としらず、慈悲もなさげも後生の事も、徳のあまりとかつあやまりて、未來苦患のある事しらず、此世來世を助かりたくば、うたぬ隻手の聲き玉へ經や陀羅尼を讀む功德より、直に佛の御姿となる、未來はちすばまたるい事よ、西も東も南も北も、泥や草木や海山かけて、蓮華ならざる處はないぞ、西方極樂十萬億も、直に足元そりや鼻の先、ソレも隻手の聲きかざれば、ドコもカシヨも三途の地獄、またば劍の山ともなるぞ、兎角つとめて見性すれば、三途地獄も劍の山も、消えて淨土とあらはれにけり、今に死ぬとも天保の皮よ、自己が開けにや(見性が出来にや)此世をかけて、萬劫末代地獄の修行、たとひ學問博識とても、死れば奈落の罪人となる、在家なりとも見性すれば、生死はなれてあきらか世界、悟ひらかぬ御寺にやましよ、色かばくちのお話なれば、晝夜ねすにも面白かるが、こんな話は氣に入るまいと、心づよくも言ひ聞かすればみんなそびらに汗水流、笑止がほして我家へかへる、無殘なるかなその歳の暮、思ひかけなき病に

白隠和尚の事ども

禪林佳話

ついで、床の上にと打ち臥したれば、今はかぎりと兩親達は、あとや枕に立そひよりて、涙ながして念佛すゝむ、娘もとより見性すれば、母に向ひて申する様は、わしがからだは去年の春に、往生極樂うたがひもなし、いまは死ぬとも苦しみはない、辭世一首と紙筆とりて、つひに一首の歌かきつけぬ、其や紀念の最後の一句

向ふ通るは清十郎ぢやないか

笠がよく似た管笠が

笠の似たのが清十郎であれば

お伊勢まゐりは皆清十郎

眼病の妙藥

白隠和尚が眼病を患へる是三居士に與へられた尺牘の中に難有い效能書がある敢て眼病患者と言はず、諸病患者の爲にその一節を茲に掲ぐ、諺に四百四病は氣からと云ふが、氣からの病氣は氣で癒さねばならぬ、それには白隠の妙藥は實に天下一品である。

白隠の妙藥

養生書に心を養ふものは黙し、目を養ふものは瞑すと申事の侍り目を養ふ者は瞑すとは、常々一向無知愚鈍の大痴人同然、目をくひねむりて、世間の是非善悪を見ず、世上の盛衰治亂を觀ぜず、後生の事も菩提の事も打忘れて、比類もなき鈍漢になりすまして、人と應對する事も好まず、安閑無事の小兒の如く、人の来るをも知らず、人の去るをも觀ぜず、一向木石女の如くなる修行を一年も二年も修練し、様子御覽可有之候、眼病ばかり拭ひたる如く全快可有之歟、是等の修業は未だ見性得悟せざる人の爲には立枯れ禪法として上もなき法毒なれども、一回圓解(見性の事)有之候人の爲には道骨を肥やし、元氣を養ふ大善行にて古人は何れも五年三年づゝ鍛錬有之事に候、老夫も若かりし時は、目の性あしく節々難儀致候所、濃州の岐阜に今川純性と申老醫の教に、蒼鷹の眼を得んと欲せば畫出でたる鷓鴣を師とすべしと云へる金言有之由被申候ひしを面白く思ひ、且又龐居士の語に、八十の老翁市郎に入る雙耳聾の如く、眼盲の如しと云へる語を兼れ合せ、常に黙々として心氣を養ふを以て第一とし、傍に彼の内親の工夫を以て家常の茶飯とし煎鍊致侍れば覺えず一身の元氣躋輪氣海の間に充實して、次第に目力力づよく相成候云云

眼病の妙藥

- 一信 心 參兩
- 一無言無説 壹兩
- 一萬事無調法 壹兩
- 一湛然不動 一兩
- 一安閑無事 一兩
- 一堪 忍 五兩

白隠和尚の事ども

眼病の妙藥

右八味禪定水壺升を以て煎す、煎法服方如常

眼病の禁物

- 第一、愛欲煩惱
- 第二、瞋恚小腹立
- 第三、思案分別
- 第四、身上の世話
- 第五、多口饒舌
- 第六、よみ書き
- 第七、法語ぐるひ(詩文を作る事)
- 第八、見解ばなし(お悟の自慢話)
- 第九、公義付き合
- 第十、辛氣きの毒

武士と正念工夫

白隠和尚が鍋嶋攝州侯に贈られた尺牘の内に、武士に正念工夫を勧められた一節がある、正念工夫とは不斷坐禪の工夫を云ふのであつて不斷坐禪の工夫は武士程修し易いものはないと云ふのである、近頃どうかすると、業務多忙、到底坐禪の餘暇杯ありませぬと云ふ人があるが、爾ういふ人や、又は駿馬に八石五斗の煩惱を乗せて走る人達は、確かに一讀す可き好文字である。

好文字

正念工夫の勝手には武士の身の上程よき事は有るべからず、武士は明け暮れ身を懦弱に持つこと叶はず、出仕にも附合にも如何にも嚴重なる者あれば、髮結ひ立て上ミ下モか又は袴羽織にて大小手挟み折目高なる起居の上には、正念工夫は溢れこぼるゝ程潔きよく打ち見ゆ、増してよき駿馬の太く逞しきに打ち騎て、百萬の敵軍をも人なき處を通る如く、乗り破りく、驅崩すべき顔色は、天晴れ見事なる不斷坐禪かく工夫してもて行きたらんには、出家は一年にて得力これ有らば、武士は一月、出家は百日にて得力是あらば、武士は三日にて利運は開かるべき者を、志なく案内知り給はぬ故に、生唼、磨墨とも云ふべき大馬の背上に開みくと、八石五斗の無明の妄想の重荷をこぼし、積み載せていかめしげなる貌曲して、邊りを拂つて乗り連れ、打通り給ふは、近頃以て残念なる風情ならずや、かく大切な場所をば遣り過して我々は仕官の身なれば、坐禪などする隙暇は勤めの内は存じも寄らぬ事なるぞなど宣ふ人々は、海中に在り乍ら水を尋ぬる心地こそすれ、四十二章經には人に二十の難あり豪貴にして道を學ぶこと難しと、誠なる哉。(尺牘の一節)

是れ誠に親切な警策である、乃木大將の如き人が生唼磨墨の如き名馬に打ち乗らるれば、威風堂々、何處から見ても立派な名將軍であるが、然からずして、正念工夫は愚かな事、ともすると、忠君愛國をも打ち忘れて、白隠の所謂八石五斗

白隠和尚の事ども

禪林佳話
 の無明の煩惱を載せてゆく、當世の似而非士人は、請ふ白隱の斯の語に參せよだ。

衆生無邊誓願度
 煩惱無盡誓斷
 法門無量誓願學
 佛道無上誓成

參禪實話終

大正五年七月一日印刷
 大正五年七月六日發行

參禪實話奧附
 正價金壹圓廿錢

著作者 村田無道
京都府南桑田郡藤田野村龍潭村

發行者 伊東芳次郎
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者 高橋賢治
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地



發行所 東京市牛込區神樂町一ノ一
 電話番町五三七、六一七一
 振替東京一七一
 東亞堂書房

~~325~~ 188.8
~~A23~~ MU59

終

